

# ヘーベルの『思ひがけぬ再会』について

——カレンダー物語として——

會 津 伸

## I

ドイツ啓蒙後期に属する作家とみなされるヘーベル<sup>(1)</sup>（Johann Peter Hebel, 1760—1826）は、永らく学校の教科書や家庭の読み物の中で親しまれてきたが、あまり文芸批評や文学研究の対象とはならなかった。一つの転機は、歿後100年における W. ベンヤミンや E. ブロッホの再評価の文章であらうが、しかしたとへば Fr. カフカは その10年も前に、しきりとヘーベルを女友だちに奨めてゐる。たしかにカフカを読む人がヘーベルを思出してもカフカの反語的表現を見落としやすく、ましてカフカがいつもヘーベルの „Schatzkästlein“ をポケットに入れてゐたといふのはヘーベル崇拜者の誇張であらうが、1916年10月にカフカが書いた2通の郵便はがきの文面は注目してよい。カフカはシャミッソーを奨め、ヴィルデンプルッフを斥けて「ときにヘーベルがとてもよいでせう。ヘーベルをお持ちですか」と書き、その1週間後に「子どもたちと読むために（君が始める筈の〔シャミッソーの〕シュレミールのほか）、なほ考へられるのは、ヘーベル、トルストイの民話集、幸運の木靴、アンデルセンです。選んで下さい、送りますから。」と記してゐる。ヘーベルをくり返し奨めたことは、単にそれが子ども向きで健全だといふ教育的見地ではなく、やはりヘーベルの作品がそれなりに作品としてすぐれてゐるといふカフカの直観的判断があったからではなからうか、たしかにヘーベル自身かくれた、すぐれた民衆教育者の一人ではあるけれども。

ここでしかしわたしは、ヘーベル研究史を辿る余裕も興味もない代りに、ゲーテが激賞した『アレマン〔方言〕詩集』<sup>(4)</sup>はしばらく措いて、ヘーベルが編輯・執筆・発行を担当せねばならなかったバーデン公国の『カレンダー』、つまり『ラインラントの家庭の友』に載った作品について、ヘーベルの散文芸術の特色を検証しておきたいと思ふ。ヘーベルは本来故郷の谷間の町や村で教育に当たりたかったので、レラッハ時代がもっとも楽しかったといふが、カールスルーエの母校に招かれ、経済的理由からも断われなかった。もともとバーデンの公国のブライスガウ以南は Markgräfler Land とよばれ、ぶどうの名産地であるが、当時の君主カルル・フリードリヒは一廉の啓蒙君主で、農奴の廃止、ユダヤ人の解放、農業の改良、教育の改善などに<sup>(5)</sup>尽してゐた。しかし1795年フランス軍の侵入を受けて戦場となり、財政的にらくではなかった。ヘーベルは母校で教義学やヘブライ語を受け持つばかりでなく、町の教会や君主の宮廷でも要

職についた。その仕事の一つに当時不評だったバーデンのカレンダーについて意見を求められ、一種の報告を書いた。<sup>(9)</sup>ここにカレンダーといふのは、17世紀中葉以来ドイツの各地で主として農民のために発行されたもので、年間暦のほか農事あり星占あり、俚諺・童謡やがて笑話や物語等々の、実用と娯楽をかねた小冊子である。今のやうに日刊新聞はおろか、週刊誌ごときも庶民のためにはなかった時代のことである。しかしいはばお上が領民に売りつけるカレンダーでは喜ばれない。ヘーベルの上申した意見は経営・印刷・内容の全面にわたるものであるが、「目ざすべき仕事はカレンダーがその内容、調子そして形態において民衆の願望と趣味に、より高い信用を博して近づくことにある。教化し裨益せんとの意図が先立ってはならず、喜ばれ方の研究にかくれて、それだけより確かに達せらるべきである」と述べてゐる。そして具体的な提案として、一般的な魅力ある名称とか、白い用紙により大きな活字できれいに印刷すること、赤い色、実用的占星、瀉血の復活、読み物の拡大、体裁を揃へることなどをあげてゐる。ヘーベルは今なほ発行されてゐる、同じバーデン中部のラールの“Der hinkende Bott”が主な記事として「前年の政治的出来事、殺人とせう盗の話、失敗した宝掘りと幽霊の話、大火事、自然現象、できるだけ自分の祖国の歴史から得た高貴な行動と気のきいた思ひつき」をのせてゐると指摘したが、それはやがてヘーベル自身再建を引受けざるを得なかったカレンダーに実現する。そして強制的な売り付けもやめ、却ってドイツ各地から引き合ひもあり、カレンダーの復興は、しばらく成功した。やがて時勢、ことに産業の構造と生活の形態も変つて来るし、ヘーベル自身のペンも止まってしまふのであるが、ヘーベルがこのカレンダーのために書いた笑話は必しも彼の独創ではない。むしろ大部分は1750年に出た笑話集 „Vademecum für lustige Leute“<sup>(7)</sup>（陽気な仲間の案内書）を種本としてゐる。このことはしかし、たとへば寓活（Fabel）とか、民話（Volksmärchen）の場合、ほとんどみな異文・変形（Varianten）と云つてよく、総じて民衆文学の特質の一つとされてゐる。ヘーベルはしかし単なる笑話や小話以上の語り物をたくさん作つてゐるので、われわれはむしろこれを取り上げたい。

## II

ところでヘーベルは、先にもふれたやうに、新たに彼が編輯・執筆したカレンダーを『ラインラントの家庭の友』（Der Rheinländische Hausfreund）と名づけて1808年—1811年用を発行し、その後は『ラインの家庭の友』（Rheinischer Hausfreund）として1813年—1815年用と1819年のために発行した。ちなみに『ラインの家庭の友の玉手箱』（Schatzkästlein des Rheinischen Hausfreunds）は1811年にコッタ書店の求めにより、初めの4巻のカレンダーより選出されたものである。

いづれにせよここで「家庭の友」とは誰であるかと言へば、常識的に、そのカレンダー自身従つてその編集・執筆者、つまりヘーベルのことと考へられよう。しかしどんな風に、どんな意味でヘーベルが「家庭の友」であるのか、またあり得るのか、これについてはもちろんヘー

ベルの作ったカレンダーをすべて詳しく検討して考へればよいのであらうが、この問題に焦点をしばった哲学者M. ハイデッガーの文章は一読に価しよう。『ヘーベル、家庭の友』(1957年)<sup>(8)</sup>と題する小論の中でハイデッガーは、家に住むことの意味を追究し、まづ家を建てるのは住むためであり、人を住まはせることが建てることの前提であるといふ。人間にとって家に住むことは、広くそして本質的に考へるなら、天と地の間に、また誕生と死亡の間に住むことであり、別の講演(1951年8月)の表現を借りれば、「根源的な一致から出て、地と天、神々と人々は一つに帰属する」とさへハイデッガーは主張する。<sup>(9)</sup>

けだし彼の持論であらう。それ故ヘーベルは『天体についての考察』を書いたし、„Schatzkästlein“はこの考察で始まると述べてゐるが、これはハイデッガーの行き過ぎであらう。これは先にふれたコッタ版選集の順序であり、むしろそれなりの意味合ひも考へられるが、コペルニクス流の一般天文学をヘーベルが物語にしたのは、受けついだカレンダーの必要から出たことでもあった。<sup>(10)</sup>

ヘーベルはその中で地球と太陽の話から始めて、月について語り、さらに遊星、彗星、恒星の順に語ってゆくが、それは単に当時の自然科学上の新知識を「愛読者」に吹きこむためであらうか。ハイデッガーは「家庭の友の本質を世界の家から考へる試み」によって答へようとして、その問題の箇所をヘーベルが月について語ってゐる終りの方から引用する。

「一体月は空で何を果さねばならぬか、といへば地球と同じだ。月はわれわれと同じく存在する権利がある。これだけは確かだ、月は、日光の反射である温和な光によってわれわれの夜をてらし、少年たちが少女たちに口づけするのを見守ってゐる。月は本来の家庭の友であり、われわれの地球の最初のカレンダー作りであり、ほかの人たちが眠ってゐるときには一ばん偉い夜回りのお頭なのだ。」〔Werke I, S. 301〕

おだやかな光で人々を見守る月といふ動機づけによって、われわれは或は M. クラウディウスの『子守歌』(„Ein Wiegenlied, bei Mondschein zu singen“ 1775)を、或はアンデルセンの、屋根裏部屋を訪れる月を友とする『絵のない絵本』(1839)を容易に思ひ浮かべるが、ハイデッガーはここに家庭の友の特質が比喩的に現れてゐるとして、しかも重厚に彼独得の考へ方を展開する。とくに月に反射された太陽のおだやかな光は、家庭の友に約束された発言のための詩的イメージであり、恋する若者たちに与へられる光は、「もっぱら地上的光でもなく、またもっぱら天上的な光でもなく、その双方であり、しかも両者は根源的で分ちがたい」と述べるあたり、まさしく比喩的にすぎよう。家庭の友の発言は「世界と人生の大きな歳の市」へ向ってなされるのであり、やがて家庭の友は詩人の別称とならざるを得ない。詩人はおのづから語る者であり、家庭の友も、もっぱら教へ育てようとするのでなく、文字通り前に言ふ(*lat. praedicare* > *dt. predigen*)者として、カレンダーの読者に語りかける者である。要するに感性の深みと精神の高みの間をゆく道また途が言葉であるから、言葉はおのづと架橋となる。詩人として世界の家の友である者とわれわれが友情を結ぶとすれば、ヘーベルこそこの友人また

詩人であるといふわけで、家庭の友はヘーベルではないと言ひながらハイデッガー独特の弁証法は、家庭の友が欠如してゐる現代に対して、ヘーベルの存在意義を高く評価するものと言へよう。

### III

ハイデッガーは家庭の友が、読者をして自然現象をよく考へることに親しませること(*geneigt machen*)を期待し、自然の本性、その生成と消滅の形相(Physis)を示して、ゲーテがヘーベルは宇宙を農民化するとまで言った考へ方から現代的な問題性へ移ってゆく。その前にわれわれは、ヘーベルの物語がまづ愛読者(*der geneigte Leser*)を虚構して、むつかしい話でもまるで食卓をかこんで聞ける印象を受けるが、むしろこの点を重視したい、なぜならここにもヘーベルの作家としての才能がみえるから。と同時にこの眼前で卓子をかこんで語りかける口吻は、高校生の頃からラテン語の演説が旨かったせるもあらうが、むしろヘーベルがじっさい、とりわけ夕食には町のレストランで市民たちとよく談笑した、さういふ彼の生活と交際にもとづくと言へさうである。13才のとき母を失くしてから、寄宿舎などで過すことが多く、社会に出てからもつひに自分の家庭をもたず、よくよその家庭で交際したし、ことにカールスルーエで出世すると、昼食を教会や宮廷の偉い人たちと摂れば、夕食にはゆっくりとその偉い人たちの家臣や庶民たちと談笑してゐた。ヘーベルはまた教育の視察や教会の仕事で各地に旅行しなければならなかったが、総じて多少ボヘミヤンの的なものがあったことも確かであらう。<sup>(12)</sup>

このやうなヘーベルがカレンダーのために家庭の友として書いた数多くの物語の中から、われわれはいま『思ひがけぬ再会』を取上げようと思ふ。おそらく一ばん有名な物語、また一ばん美しい物語とされてゐるからでもあるが、その素材、影響、研究について一ばん資料がそろつてゐるからでもある。果してこの小品がカレンダー物語としてほんとうに美しいかどうか、その辺を少しく見究めたいと思ふ。

1808年にドレーズデンで出版された G. H. シューベルトの『裏からみた自然科学』(原題は „Ansichten von der Nachtseite der Naturwissenschaft“) は、当時の単なる唯物的科学研究にあき足らず、シェリングの自然哲学の感化のもとに、人間と自然の間の根源的關係を捉へ直さうと試みたもので、ロマン派に少なからぬ影響を与へた。その第8講：有機的世界で、ミイラは別としてふつう人間の屍は動物のそれよりはるかに早く崩壊する話をして著者は、同じやうにスウェーデンの学者たちが報告した「あの珍しい屍も、石に變じたやうにみえてガラス箱に納められたが、空気の侵入に抗しがたく、一種の灰の状態に崩れ去った」と述べてゐる。1722年のウプサラの学事公報に出た記事をシューベルトの要約として引用してみると、

「この以前の鉱夫は、フェールン〔ストックホルムの北西約200キロ〕の鉄山で二つの縦坑をつなぐ坑道が貫通したとき発見された。屍は、鉄の硫酸塩水に浸り切って、初めはやわらかだったが、しかし空気にふれさせるや否や、石のやうに固くなった。50年間この屍は、地

下300エレ〔約200メートル〕の所に、あの硫酸塩水の中に横たはってゐた。そして誰一人として事故に遭った青年のまだ変ってゐない表情を見分けようもなく、誰一人としていつから青年がその縦坑に横たはってゐたか知りやうもなかったであらう、鉱山の記録も民間の伝説も多数の事故にもかかはらず確かではないので——もしもかつて愛した表情の記憶を一人の誠実な老女が保ってゐなかったら。なぜなら引き上げられたばかりの屍のまはりに、見知らぬ若者の表情をみつめながら人々が立ってゐるとき、松葉杖をつき白髪の小柄な老婆が、涙をながしながら来て、かつての婚約者の屍の上にくづはれんばかりである、墓に入る前にかかる再会をめぐまれたその時を感謝しつつ。そこで人々は、いぶかしげにこの珍らしい一組の再会をみてゐた、その一人は死んで深い坑道にゐたのに若々しい顔付きだし、他の一人は体こそ年老いて萎びながらも、青春の愛を誠実に渝ることなく保ってきた。そして50年の銀婚式にのぞんで、まだ若々しい花婿は固く冷たく、年老いた白髪の花嫁は熱い愛にみちてゐるのをみた。<sup>(13)</sup>」

これが科学者の端的な報告であるが、やはり後半には珍しい再会の与へた感動的な印象が滲んでゐる。屍の人ばかりと老婆のかけつける条りは、直説法現在の時称だからでもある。之を受ける主文とつづく結びの副文章は過去形にもどり、18世紀の初めの方の出来事だったことを思ひ知らされる。残念ながら最初の直接の記録は、もはや確かめる術がないであらう。

#### IV

ヘーベルはしかし直接シューベルトの本に拠ったのではなかった。1809年の春に雑誌 „Ja-son“ が「詩人の課題」として前記の報告をシューベルトの本より転載して、一般に詩作をすすめたので、その結果20篇ぐらゐの作品が生れたらしい。しかし今日もっともよく「詩人の課題」を果した唯一の作品は、まさにヘーベルの『思ひがけぬ再会』のみであり、1810年末に1811年用のカレンダーに載ったわけである。約10年のちに E. T. A. ホフマンが物語集『ゼラーピオンの仲間たち』の一つとして『フェールンの鉱山』(1818年)を書き、さらに19世紀の末年にホーフマンスタールが似た題の五幕物を書いた。今日ヘーベルの作品と比べ得る作品はこの二つである。そしてヘーベルの作品は、のちの2作品と比べれば、いかにも小粒である。しかし文学作品としての密度からいへば、ヘーベルの小品が断然光ってゐる。ヘーベルの題名『思ひがけぬ再会』が暗示的である。<sup>(14)</sup>

ヘーベルの物語は、ふつう全体で約2ページ分の長さであり、一切改行された段落がない。ほとんど一気に語られ読まれるべきものであらう。しかし誰でも一読してすぐ判るやうに、大きく3段に分れて居り、しかも極めて特徴的な分れ方である。適切かどうか別として、これを三幅対の掛物の、或は祭壇画の物語に見立てるとすると、第1段で結婚式を控へた鉱山町の青年と乙女の幸福と思ひもかけぬ別れ、第2段は打って変ってそれから約50年間のヨーロッパの政治的大事件の概観、そして第3段はふたたび鉱山町で50年後に起った「思ひがけぬ再会」を

描いてゐることになる。そこでわれわれはヘーベルの語り口をまづ各段ごとに尋ねてみよう。

「スウェーデンのフェールンで50年あまり前に若い鉱夫がその若くてきれいな花嫁に口づけしてから言った:」

なんと簡潔な語り始めだらう、所と時と人物がちゃんと揃ってゐるばかりか、いきなり若者たちが口づけしたといふ。これはしかし芝居でも何でも無い、極めて冷静な報告といふよりは、心温かな出来事そのものを提示してゐるのだ。たしかにホフマンも、これに倣ったホーフマンスタールも、若者を固有名詞で呼び、エーリスとウラ、或はエーリスとアンナと名づけてゐる。しかしヘーベルはその必要性を感じない。だからといって若者の描き方が抽象化、類型化されるとみるのは早計であらう。青年は乙女に言った:

「聖ルチアの日〔12月13日〕にぼくたちの愛は牧師さんの手で祝福される。それでぼくたちは夫婦となり、ぼくたち自身の愛の巣を作らう。」

これに対して美しい花嫁は、やさしい微笑をたたへて言った:

「そして平和と愛がそこに住むのよ。それであなたはわたしの唯一ですべてよ。だからあなたなしでは、わたしはほかへゆくより墓の中の方がいいわ。」

青年と乙女のかういふ問答は、或は紋切り型と受けとられよう。しかしヘーベルは二人が結ばれるに至った過程と経緯は省いたのである。およそ心理描写を試みようとはしてゐない。このことを念頭におけば、どこの国でも、またいつの時代にも、愛し合って夫婦となり家庭を築かうと決心した青年男女が、むしろ社会的に、単なる私的な睦み事としてではなく、大人の社会の一員として立たうとするとき、誰しもが交はす言葉であり、初々しく健康な誓ひとして受けとれると思ふ。その意味でここにごく平凡な、しかし理想的な若夫婦の誕生を期待してよいわけで、すでに牧師も之を承認し、従って公示しようとしてゐる。いささか古めかしいが、ヨーロッパでは中世から重婚や近親婚をさけるために、結婚に先立って公示がなされる<sup>(18)</sup>。その仕来りに従って牧師が聖ルチアの1週間前に教会で2度目の公告をしたとき、「そのとき死神が申告した。」とヘーベルは語る。思はず身震ひするほど強烈な印象を与へられるが、われわれにはいささか唐突でもある。死神の申告を牧師が受けつけたとも、2人の青年男女が衝撃を受けたとも、教会の会衆たちがどんな反応を示したのかも、ちっとも語られてゐないからである。ある研究者のやうに、不測の死を叙述する可能性をのこすためと考へるのは、目的を先取りしすぎて不自然であらう。もし強いてヘーベル自身の心理的経験を想定するなら、彼がもの心つくまへに失った父のことにならうか。物語の冒頭の50年あまり前をヘーベル自身に当てはめれば、作者自身の誕生ないし両親の結婚のころとなるからである。

ただし語り手としてヘーベルは、死神が先取りした異議申立の事由として、2度目の公告の翌日に起った不測の事故死をあげてゐる。しかも当人はその朝、黒い鉱夫の服を着て、花嫁の家に立ちより、窓を叩いてお早うと言ったが、もはや今晚ははなかった、つまり鉱山から帰って来なかった。鉱夫はいつも経かたびらを着てゐたとあり、つねづね覚悟してゐたものか、そ

## ヘーベルの『思ひがけぬ再会』について

れとも結婚を控へて何か虫の知らせでもあったのか、われわれには分らない。またルチアの日が13日の金曜日であれば一そう不吉の兆が重なるけれども、断定しがたい。要するにヘーベルは詩人の特権を用ひて、不慮の事故に遭った青年の身の上をおもひ、残された花嫁の胸中を思ひやるのだ。

「そして彼女は徒らにその朝、結婚の日を迎へる彼のため黒いネッカーチーフに赤い縁飾りをつけてゐたが、彼が不帰の客となつたとき、彼女はそれをさし置いて彼のために泣いた、そして彼を決して忘れなかつた。」

ヘーベルの文章は、事故の原因を徒らに揣摩憶測するものでもなければ、泣き女の役を演じてみせるのでもない。穿さくも感傷もヘーベルには無縁のやうである。黒い経かたびらを着たまま永遠の暗闇に吞まれた青年と、彼の頸にまくべき黒いネッカーチーフに赤い縁飾りをつけて泣き伏す乙女と、むしろ黒い布で強く結ばれてゐるとすれば、赤い縁飾りこそおのづから二人の愛の絆を象徴してゐる、或はいつまでも消えない愛の火種として残つてゐる、と言へるかも知れない。ヘーベルのこの物語で形容詞が簡潔かつ適切に用ひられてゐることや、自動詞が一般に優勢であることなど、つとに指摘されてゐるが、平凡な併列の接続詞 'und' の何気なくしかも非凡な使ひ方によって、主文の併列のうちにおのづと散文のリズムを成してゐることも注目すべきであらう。<sup>(47)</sup> ことにこの第1段の終りで乙女の態度が他動詞の連続で表現されてゐることは、おのづと彼女の誠実な愛の強さを物語るものではなからうか。

*Er kam nimmer aus dem Bergwerk zurück,| und sie saünte vergëblich sëlbigen  
Morgen| ein schwärzes Hälstüch mit rótem Ránd| für ihn zum Hóchzeitstäg,|  
sòndern äls ër nimmër kám,| légtë sie ës wég| ünd wéintë üm ihn| ünd vërgáß  
ihn nie.|*

ここに現れた主文も副文も成分も一種の振子運動に似たリズムを持ってゐて、それが快く寄せては返す波のやうに連なり、前半はやや長目の大きなうねりをなして、後半 (sondern 以下) は短かく、しかし強い繰り返しをなして連動してゐる観がある。これほど単純な控へ目な表現でしかも密度の高い文体は、さうざらにあるものではない。

## V

われわれは先に語り手が自らの生涯を50年溯れば、自分の誕生と父の死に至ると述べたが、この50年あまりのドイツと云はず、中央ヨーロッパの歴史を一望のもとにわれわれの眼前にパノラマのやうに展開してみせるのが、この物語の第2段である。つまりヘーベルは(1)1755年11月のリスボンの大地震から始めて、50年間の世界史的大事件を列挙してゆく。まづこのリスボンの大地震は、いふまでもなく当時ヨーロッパで有数の都であり港である商業の町がほとんど瓦礫の山と化した悲惨なもので、少年ゲーテも伝へ聞いて神の存在を疑ふに至つたほどである。<sup>(48)</sup>

つづいて(2)七年戦争 (1756—1763)、プロイセンのフリードリヒ II世は強引に戦ひつゞけて、

つひにオーストリアを屈服させて、シュレージエンを所領とした。まもなく(3)マリア・テレジアの夫であるドイツ皇帝フランツⅠ世がインスブルックで1765年8月に歿した。(4)宗教改革に対抗してカトリク教会内に生れた「イエス会」(Jesuiten=Societas Jesu)はつひに1773年法王クレメンスⅩⅣ世によって禁止された(尤も1814年には再興される。ただし国によって異なる)。(5)「そしてポーランドが分割された。」これまた何と簡潔極まりない表現だらう、あるまじきことと云はんばかりである。じっさいポーランドは、新たに抬頭してきたプロイセンとロシアおよびオーストリアの列強間の競争と妥協によって、1772年・1793年・1795年の3回にわたって分割され、消滅した。(6)権勢と栄華を誇ったマリア・テレジアも1780年11月末ヴィーンで歿した。もちろん内政の改善にも尽したが、厳格なカトリク教徒として啓蒙は受け容れがたかった。(7)デンマークで大臣ストルーエンゼーが処刑されたのは1772年4月、侍医から成り上った政治家は、啓蒙を導入したものの、王妃と情を通じ政敵に追はれた。当時世界の人をおどろかしたスキャンダル。(8)「アメリカが自由になった。」ヴァージニア州憲法における人権宣言が1776年6月、ついで7月4日13州聯合の独立宣言となり、イギリスとの間に独立戦争が戦はれ、フランスやプロイセンの後楯を受け、1781年ヨークタウンの勝利が決定的となり、1783年ヴェルサイユ条約でアメリカ合衆国が生れたわけである。(9)「フランス・スペインの聯合勢力はジブラルタルを征服できなかった」とは、1805年10月ネルスン提督のひきゐる英国艦隊がトラファルガー沖で勝ち、ナポレオンのフランスに対して完全に制海権を得、やがて世界の海を制する帝国の発展をみちびく出来事であった。(10)17世紀末オスマン・トルコの攻勢に対してヴィーン防衛に成功したオーストリアは、18世紀においては逆にたえず攻勢に出てバルカンへ領土を拡張した。ハンガリー南部のドナウ左岸にある奥深いヴェテラニ洞穴は、1691年にトルコ軍に抗して1月半守り抜かれたが、シュタイン少佐も守り抜いてトルコ軍を退けた。(11)しかしオーストリアの啓蒙専制君主ヨーゼフⅡ世は、農奴・拷問・修道院を廃止(1781年)したが、領土的野心は満たせぬまま、1790年に歿した。(12)スウェーデンの国王グスタフⅢ世は、みえをはった外交政策で1788—90年ロシアと戦ひ、フィンランドを領有してゐた。しかし次代の1809年にはこれをロシアに奪はれた。北欧の強国スウェーデンの膨脹はとまってるたのである。「そして(13)フランス革命と(14)長い戦争が始まった。」自由・平等・博愛の理想を高くかかげたフランス革命は、伝統的な君主制に反対する民主制の要求であるが、ナポレオンの出現によって官僚機構とブルジョワ支配に道が開かれるとともに、革命の波及をおそれる諸国との間に戦争が絶えなかった。とくに北イタリア、バイエルン、スペイン、ハンガリー、ザクセン、東プロイセン、ロシア、そして当のフランス国内での防衛戦争と100日戦争に至るまで、ヘーベルの憂慮と予想をこえて、ヨーロッパ大陸に砲声と硝煙が絶えなかった。M. クラウディウスの『戦争の歌』(1777年)が痛切にひゞく所以である。

「戦争だ！ 戦争だ！ おお天使よ防げ！ 神も干渉したまへ！

残念ながら戦争だ—そこでわたしは戦争に責任を負はぬことを切に願ふ！」



(15)「そしてレーオポルトⅡ世も墓に下った。」兄のヨーゼフⅡを継いだ彼はハープスブルク領内のベルギーやハンガリーの反抗を抑へ、プロイセンとも結び、トルコ戦争を終らせることができたが、皇帝の在位わずか2年であった。(16)「ナポレオンがプロイセンを征服した。」1805年に長駆してアウステルリッツにオーストリア軍を破ったナポレオンは、ロシアと結ぶプロイセンを討って1806年10月イエーナ-アウエルシュテットにこれを撃破、東プロイセンに逃れた王と政府を追ひ、1807年7月ロシアとプロイセンに和約せしめたのであった。ヘーベルはしかし彼の物語の中でも有名な一つである『皇帝ナポレオンとブリエンヌの果物売り』(1809)を書き、かつてナポレオンがブリエンヌ・ル・シャトーの幼年学校の生徒のころ借りた小金を、後日わざわざ尋ねて元利合計1200フランを返した上、果物売りの二人の子どもの面倒をみると語る。しかしこれはナポレオンを偉人英雄として讃へるためではなく、果物売りとの問答からも察せられるやうに、どんな人でもお金のことはきちんとしなければならぬといふのがヘーベルの真意であらう。ヘーベルの物語には大小を問はず、いろいろの形でじつによくお金が登場するが、現実的で幻想に捉はれない場面を作り出すとともに、若い時から金銭に苦労したヘーベルの世智も働いてゐると思ふ。<sup>(9)</sup>(17)ヘーベルのいはば歴史年表の最後にあげられたのは、「イギリス軍がコペンハーゲンを砲撃した」ことである。1801年4月の海戦につづいてイギリス海軍は、1807年9月ふたたびコペンハーゲンに迫り砲撃して、デンマーク艦隊を全部出港させた。この事件もまたヘーベルによって「ティルジット和約後の最悪の不幸」として物語になった(1809年)。フランスに利用されることを怖れて艦隊の引渡しを求められ、これを拒んだコペンハーゲンは横暴なイギリス艦隊の砲撃を受け、美しい町は瓦礫の山と化した。むろんヘーベルの筆は小さい弱い者に満腔の同情をそそいでゐるが、そのさい決して感情に走らず、強引なイギリス側の談判ぶりとデンマーク側の対応、むしろ強いられた犠牲の様子を述べてゐる。<sup>(10)</sup>

## VI

以上ヘーベルが数へ上げた50年間の大きな出来事は、項目にして17、その中で目立つのは、戦争に関する7項目、奇妙にも皇帝の死歿が4、大きな政治上の変化3であらう。ことに最後はポーランドの悲運、アメリカの独立、フランス革命であって、文字通り世界史的影響を今後及ぼさうとする出来事である。これに対してヴィーンの皇帝の相つぐ死去は、神聖ローマ・ドイツ帝国の臨終の姿である。リスボンの大地震が唯一の天災の記録であるが、それに比べて戦争といふ人災がいかに多いことか。ヘーベルにとってナポレオンもネルスンも決して英雄とはなり得ないとともに、何かしら不気味な戦争の存在を無視することもできないのである。

しかし物語の第2段、このヘーベルの歴史年表は、このやうな華々しい出来事の摘記で終わるはゐない、ここが却って重要であらう。コペンハーゲン砲撃につづけて彼は語る：

「そして農夫たちは種をまき、刈ってゐた。粉屋は粉をひいた。そして鍛冶屋は打ち叩いた、そして鉱夫たちは鉱脈を求めてかれらの地下の仕事場で掘ってゐた。」

なんと巧みに話をふたたびファールンの鉱山へと引きもどしてみせることだらう。しかしその前に、農夫と粉屋と鍛冶屋たちはどうしたといふのであらうか。世界史の出来事、つまり皇帝たちの死や、浅ましい戦争や、政治上の大変革と、どう関はるといふのか。ヘーベルの立場からすれば、少くとも一つははっきり言へることは、世界史的大事件と日常生活、それも必しも楽ではない生産活動が肩を並べ得るといふことである。しかも後者の記述で特徴的なことは、動詞がみな自動詞の単純過去形で、短い主文がみな、単純にみえる接続詞 ‘und’ で並列されてゐることである。ここに勤労者の自主独立の姿勢なり、世界の激しい変化や盛衰にもかかはらず落着いて働く姿勢を読みとることもでき、却ってこのやうな日常的生産的生活の存在、その重みによってこそ、すべての人々の、国々の生活もまた保たれてゐる。もしさう受けとってよければ、この短いカデンツァにおいてこそ、第1段の終りと同じく、構文が様式となり、思想となつてゐることを読みとみることができよう。<sup>(21)</sup> 世界史的大事件には名声と不安と無常が伴ふのに、日常の勤労には平安と同情と希望があり得るといふことである。

## VII

果せるかな第3段はこの報告ないし物語の冒頭にかへり、つまり「50年あまり前に」と云つたその現在の時点に立ちもどって話をつゞけるわけであるが、ヘーベルはここに具体的にその時点を示す：1809年の夏至のころ、と。そしてスウェーデンの学者の報告に従つて、二つの縦坑をむすぶ坑道を、300エレの地底で貫通させようと試みてゐたとき、人々は碎石と硫酸塩水の中から一人の青年の遺体を掘り出した。「まるで1時間まへに死んだか、それとも仕事をしながら少し眠りこんだかのやうだ」といふあたりから、作者の詩的想像力とか内なるヴィジョン（J. Pfeiffer）とか云はれるものが文章に現れてくる。地上に運び出されたとき、その青年の両親、友人知己すべてがとうに死んでゐて、青年の顔を或はその事故を知つてゐると主張できる者は誰もゐなかつた。つひにかつての婚約者がその場に現れた、白髪でぢぢこまり、松葉杖をついて、そして花婿を見分けた、その様子は、苦痛よりもむしろ喜びにうっとりとして、屍の上に身をかゞめたといふ。そして永いはげしい感動ののち、やうやく老女は口を開いた：

「これはわたしの婚約者です、この人の死を50年もの間歎き悲しんできましたが、神さまはもう一度わたしが死ぬまへに会はせて下さいます、結婚式の一週間前にこの人は鉱山へゆき、二度ともどつて来ませんでした。」

もとの報告では、老女はこの世を去る前に一目でも婚約者に会へたことを感謝する言葉を呟いたと思はれる節があるわけだが、ヘーベルは苦痛の表情を歓喜のそれへ高めたと言へよう。かういふ花嫁の胸中は察するに余りあるのみで、われわれは語り手の言葉を素直に受けとればよい。けれどもその場でこのまことに「思ひがけぬ再会」に立会つた人々は、さすがにやや複雑な気持をもつた筈である。詩人の想像力は報告の記事に即しながら、その点をさらに鮮かに語ってくれる。

## ヘーベルの『思ひがけぬ再会』について

「人々は、かつての花嫁をおとろへた、無力な姿で、そして花婿を若々しい美しい姿で見たとき、そして彼女の胸には50年を経て青春の愛の焰がもう一度目ざめたのに、彼はつひに口を開いてほほ笑むことなく、眼をあけて再認することもしなかったのを見たとき、そしてさいごに彼女が、彼の身内に属する、なんらかの権利ある唯一の者として、彼を鉦夫たちの手で、教会の墓地に彼の墓ができるまで、ささやかな彼女の部屋に運んでもらったとき、まわりの人々の心はすべて哀しみと涙に捉へられてゐた。」

原文の冒頭は「そのとき周りに立ってゐる人々の心はすべて哀しみと涙に捉へられた」といふ主文であるが、以下いくつも副文を重ねてヘーベルは、再会した婚約者のあまりにも対蹠的な姿を報告に則として陳べながらも、老女を気遣ひ見守り、埋葬の用意をする人たちの一員のやうに語ってゐる。もちろん誰も老女の胸中の愛が、50年の歳月を経てかくも純粹誠実に燃えたことを疑はなかった、つまり愛の誠実が時の流れを越えたことをみなが目撃し、確信したのであった。

翌くる日、墓地の用意ができたとき、ふたたび鉦夫たちが彼の屍を運んだが、彼女は例の赤い縁飾りをつけた黒いネッカーチーフを彼にまきつけてやり、自分は日曜日の晴着を身につけて従った、「さながら埋葬の日ではなく、彼女の嫁ぐ日であるかのやうに。」銀婚式といふ言葉はすでに報告の記事にもあったが、黒いネッカーチーフは全く詩人ヘーベルの発明であり、赤い縁飾りに愛のしるしをこめて、いま永久にこの2人は結ばれようとしてゐる。ほんとうにさうであらうか。ヘーベルはその理由として、墓地で彼女がしばしの別れにのぞんで吐露した言葉をあげる、われわれもこれに注目しよう。

「さあお休みなさい、もう1日か10日涼しい婚姻の床で。長くかかりませんやうに。わたしは一寸用事があるわ、そしてすぐに来ます。そしてまた夜が明けるわ。——大地は一度返してよこしたものを二度とまた引きとめないでせうよ。」彼女は立ち去り、もう一度ふり向いたときさう言った。

何と爽やかな結末であらう。老い先短い彼女にとって——婚約したのが20才前後とすれば、すでに70才である——やがて彼といっしよの墓に葬ってもらへると信じて疑はないし、やがて夜が明けるとは——直訳すれば「昼になる」であるが——、彼岸の消息を指す言葉であり、復活と永遠の生命を望んだとておかしくはないであらう。この彼岸ないし未来は「昼(Tag)になる」によって暗示されてゐるのみで、「物語の構造」を追究する E. レメルトの言葉を借りれば、「この未来は人間的誠実に関するこの名作の詩的封印であり、それ故すでに未来は〔作中に〕言ひ表はされた願望のうちに、読者の眼前にはっきりと決定的に展開されてある。」<sup>(9)</sup>だがふつうの小説の期待の様式とすっかり同じであらうか。

## VIII

しかもヘーベルは、さういふ来世の信仰も含めて一夫一婦の理想を高く謳はうとしたのであ

らうか。教材として取り上げる場合でも、ヘーベルはここにただ珍しい出来事を物語っているのではなく、より深い意味を開示する。ただしそれは道徳的方式によらず、人物・行動・事物の象徴的イメージのうちに新しい現実のヴィジョンとして示される<sup>(64)</sup>として、多くの場合作品の意味内容を示す標題を重くみて、そこから生ずる緊張と言葉の独特のリズム感を追究することが求められる。その意味でわれわれももう一度この作品を振り返ってみなければなるまい。

われわれは身近かな問題から考へてみよう、つまり50年を隔てたまことに「思ひがけぬ再会」といふ話は、われわれの身近に起り得るとすれば、之はヘーベル自身の50年余の生涯、ことに相思相愛でありながらつひに結ばれなかった婦人との関係、要するにヘーベルの青春の文学的結晶と考へられさうである。すでに W. ムシュクがこの点を興味深く指摘して、「夢のやうに沈んだ青春の体験の縦坑から形成する力を引き出した詩人牧師」であるといふ。ムシュクによればヘーベルの故郷のシュヴァルツヴァルトでは太古に鉄山があったらしいが、「ヘーベルはメーリケ、アイヒェンドルフと同じく青春をおのが信仰となし、これを決して失ひたくなかった。」<sup>(65)</sup>のである。

たしかに最近の研究者も「この物語はじっさいほとんど明白にヘーベルの最大の散文作品としての値打ちがあるし、彼自身のギュスターヴ・フェヒトに対する愛の表現と理解される<sup>(66)</sup>」と述べてゐるが、われわれは青春或は愛の物語としてごく象徴的にさうなっている、と受け取りたい。なぜならふつうの青春は第一段にいはいはば半分描かれて終り、それは時代の流れの中に埋没したにもかかはらず、半世紀後に少くとも老いた女性に青春が生き残っていることを示したわけで、ヘーベル自身は最後までフェヒト嬢と文通してゐたし、決してこの物語で青春を追想したり、再現することを願つてはゐないと思ふ。

多くの研究者が時間といふ視点から、「時と永遠」の緊張関係から、或は時代と個人の生涯・日常の関係から、興味深い重要な見解を陳べているが、たとへば L. ローナーは、時間が変化の尺度であるとき、半世紀の世界史はこの物語では、埋草でありもう一つの時間の不在証明にすぎない、時間の架橋が深い淵に臨んで2人をみつめてゐる、といふ<sup>(67)</sup>。時間の架橋がどのやうに実現してゐるか、読者の受けとめ方はいろいろあらうけれども、恒常的な時間と変化する時間の両者を貫くものが語られてゐるとみる点は、誰も異存ないであらう。ベンヤミンは「そこに形而上学がものをいひ、それは経験されたものではあるが、どんな形而上学が＜体験した＞よりも重要である」(1926)と半世紀の叙述を受けとめ、さらに注意深くヘーベルは世界史の歴史家ではなく、年代記作者であると指摘してゐる<sup>(68)</sup>(1929)。さらに興味深く思はれるのは、ヘーベルの物語に世界審判の趣きを感じる人はベンヤミンだけではないが、ベンヤミンは「これは最後の審判の記録をよむやうだ。ただ一切終末論的なものは欠けてゐる。全地がこの物語では神の正義の島ロードスとなった<sup>(69)</sup>」とさへ記してゐる。われわれはいまこの発言をコメントする余裕はないが、愛の再会をしも正義の実現と捉へ得るなら、ただに措辞においてのみならず、まさに発想とさらに思想の核心において、ヘーベルの真意に近いであらう。長い過去に現実に現

## ヘーベルの『思ひがけぬ再会』について

在を打ちこんだとブロッホは作品の構造を捉へたが、時間論はややもすれば機能論に傾く惧れがあるとするれば、われわれは啓蒙と革命によってヘーベルの精神風土が成り立つとみるベンヤミンの出発点<sup>(82)</sup>が、まさにヘーベルとその作品に対してより説得的であると思ふ。

そしてわれわれの作品についても、まことに類例のない再会の出来事を通してヘーベルは、単なる青春の記念像を刻んだのではなく、まさに時と永遠の交錯するさ中において人間的誠実が、とくに若き愛のそれが、いかに悲しくも感動的であるかを示すことができたと言へるであらう。たしかに詳細な心理描写はない。それはたとへばホフマンが試みたものであり、深く大地へ落ちることが根源的なものへの憧憬とされるし、ホーフマンスタールも山の女王まで登場させて、現代的な愛と孤独の深層心理を舞台に示さうとした。しかしヘーベルは「啓蒙された人文主義」(ベンヤミン)に立つものといふべく、しかもすでにみてきたやうにヘーベルの語り口は、眼のまへで肩をならべて語ってくれるかのやうで、物語そのものは、いはば「フィルターにかけられ、距離をおいて、様式化されてゐる」<sup>(83)</sup>。しかもそれは決して死んだ様式、まして定式ではない。今日郷土カレンダーに載って読まれても不自然ではない、否一ばんそこがピッタリするであらう。世界史を背景に庶民の感動が物語となったからである。その意味でこれはヘーベルの最も成功したカレンダー物語である。

やはり『思ひがけぬ再会』は愛と誠実の極点を示すものであり、心理分析の代りに世界史の年表を組みこんで、再会の感動を却って浮き彫りすることに成功した。ヘーベルは „Jason“ 誌はみたけれども、シューベルトはよまなかったであらうか。しかし読んだとしても彼が著者の意に反して取り上げなかった一点は、屍が空気にふれて一種の灰と化したといふ話である。諸行無常はあまりにも身近かであったせゐであらうか。むしろ愛の再会そのものが彼にとっては大事だったであらう。悲しくも誠意あふれる再会にこそヘーベルの真意が向けられてゐたと考へたい。さいごにわれわれは、シューベルトもまた愛を重んじたことを附け加へたい、なぜなら友人の画家 J. G. フォン・キューゲルゲンによせた巻頭の献辞の中で、「君に対する愛こそこの本の贈物にまさりかつ不変であらう、人生にまさりかつ不滅だらう」<sup>(84)</sup>と書いてゐるからである。

(1981年7月稿)

## 註

- (1) ヘーベルはバーゼルで生れたが、翌年同地の都市貴族に仕へてゐた父が亡くなり、母の故郷(シュワルツワルト南端のヴィーゼ川の谷間)の村や町で成長した。カールスルーエの高校をへてエルランゲン大学で神学を学び、1783年から1791年夏にかけて故郷の町レラッハの学院に勤め(教師兼副牧師)、そのころ詩作を始めた。秋よりカールスルーエの母校に勤め、同地の宮廷教会にも勤めた。やがて教授となり校長となり、その頃カレンダーの発行に当った。さらに福音派の監督長やバーデンの評議員でもあった。およそ当時の文壇とはかけはなれた存在であったし、作家としての活動も40才すぎである。従って文学史的に前半生は同時代の „Sturm und Drang“ にも、後半生は „Romantik“ にも組み入れがたい。おそらく作家として一ばん近いのは、ハムブルクの “Wandsbecker Bothen” の発行者で詩人の Matthias Claudius (1740—1815) であらうか。

- (2) Rolf Max Kully, J. P. Hebel, Stuttgart 1969, S. 57
- (3) Franz Kafka, Briefe an Felice 1967, S. 715 および 722
- (4) Goethe の書評は1804年; Hebel Werke II, S. 501~506 所収
- (5) Kully, a. a. O. S. 49
- (6) „Kalendergeschichten“, hrsg. von Winfried Theiß, Stuttgart 1977, S.355ff. なほ詳しくは Ludwig Rohner, Kalendergeschichte und Kalender, Wiesbaden 1978, S. 179 参照
- (7) Maria Lypp, „Der geneigte Leser verstehts“ in: Euphorion 64 (1965), S. 392 および Rohner, a. a. O. S. 274f. なほ後者はカレンダーの内容・形態ともに „Schweizerboten“ の編者 Heinrich Zschokke を手本としてゐたことを強調する。上記の報告の中でもヘーベルは、チョッケの読み物が「品よく害のないやうに取扱はれてゐる」と述べてゐる。
- (8) Martin Heidegger, Der Feldweg; Hebel—Der Hausfreund, hrsg. von Hartmut Buchner, 東京 1961による。
- (9) Bauen Wohnen Denken in: M. Heidegger, Vorträge und Aufsätze, Pfullingen 1959, S. 149
- (10) Rohner, a. a. O. S. 171
- (11) Hebel II, S. 501f.
- (12) Kully, a. a. O. S. 25
- (13) Gotthilf Heinrich Schubert, Ansichten von der Nachtseite der Naturwissenschaft, Dresden 1808, 復刻版 Darmstadt 1967, S. 215f.
- (14) J. P. Hebel, Unverhofftes Wiedersehen, Werke I, S. 271~273; E. T. A. Hoffmann, Werke II, S. 269~295 (1967年インゼン版); H. v. Hofmannsthal, Ges. Werke, Dramen II, S. 82~174 (1979年フィッシャー版)
- (15) 教会における結婚の変遷については Ingeborg Weber-Kellermann, Die deutsche Familie, Frankfurt am Main 1974, 1979, S. 54 参照
- (16) Michael Scherer, J. P. Hebel, „Unverhofftes Wiedersehen“ in: Germanisch-Romanische=Monatsschrift, N. F. 5 (1955), S. 313
- (17) Johanness Pfeiffer, Die Geschichte von dem Bergman zu Fahlun [主に Hebel と Hoffmann の比較, 註で Hofmannsthal に言及] in: Wege zur Erzählkunst, Hamburg 1954, p. 47 および M. Scherer, a. a. O. S. 314
- (18) 『わが生涯より, 詩と真実』第1部第1巻参照
- (19) „Kaiser Napoleon und die Obstfrau in Brienne“ (1809) Hebel I, S. 12—14; M. Lypp, a. a. O. S. 392
- (20) Hebel I, S. 449~452
- (21) M. Scherer, a. a. O. S. 315 参照
- (22) 5 ページの拙訳参照
- (23) Eberhard Lämmert, Bauformen des Erzählens, Stuttgart 1955/1972, S. 191 [Hebel の本作品について論じてゐる。]
- (24) Paul Nentwig, „Unverhofftes Wiedersehen“ Betrachtungen über die Prosadichtung von J. P. Hebel in: Westermanns pädagogische Beiträge, 2 (1950), S. 203
- (25) Walter Muschg, Biographische Skizzen (1928) in: Pamphlet und Bekenntnis, Olten 1968, S. 75
- (26) Kully, a. a. O. S. 56
- (27) Rohner, a. a. O. S. 292
- (28) Walter Benjamin, J. P. Hebel, Zu seinem 100. Todestage in: Gesammelte Schriften, Frankfurt am Main 1980 Bd. II, S. 279

ヘーベルの『思ひがけぬ再会』について

- ②9 W. Benjamin, Gesammelte Schriften, Bd. II, S. 637f.
- ③0 W. Benjamin, Hebel gegen einen neuen Bewunderer verteidigt in: Gesammelte Schriften Bd. III, S. 205
- ③1 Ernst Bloch, Nachwort zu Hebels Schatzkästlein (1965) in: Literarische Aufsätze, Frankfurt am Main 1965, S. 178
- ③2 W. Benjamin, Gesammelte Schriften, Bd. II, S. 636
- ③3 Rohner, a. a. O. S. 291
- ③4 Schubert, a. a. O.

附記 ヘーベルのテキスト引用は、つぎのインゼル版に拠った：

Johann Peter Hebel Werke Bd. I, II. Hrsg. von Eberhard Meckel, Eingeleitet von Robert Minder. Frankfurt am Main 1968

なほフランスのゲルマニストであった R. マンデルには、郷土文学やナチ時代にヘーベルを「かっ  
いだ」作家・思想家（戦後のハイデッガーも含めて）を追究したすぐれた論考がある。Vgl. Robert  
Minder, Dichter in der Gesellschaft, Frankfurt am Main 1966: suhrkamp taschenbuch 33,  
1972, S. 126ff. und S. 234ff.